

居ながら、前に全體として起源を求めた舊い象徴が、如何いふ風にして、決して全く無くならずに残つて居るかを述べておきたいのである。之は、例へば犍陀羅自身のものに、成道の佛陀の上に樹を現はしてゐる、初轉法輪の佛陀の手が寶座に輪を印してゐる如きである。之と同様の觀察は、今日に遺つてゐる中世の彫刻で佛陀の傳記又は説話に關する斷片の殆んど全部について、云ひ得るのである。中國の板彫を取つて見ると、之には、四又は八大奇蹟を現はしてゐるので、(乙、附圖、第十九、一圖。又は、甲、四九八圖)後の四、即ち、舍衛城の大奇蹟、サーンカスヤ *Sankasya* の降臨、吠舍離に於ける獼猴の供養、王舍城の狂象調伏は、之等四聖都の誇であり富であるが、之等が最初の四大奇蹟に加はつたのである。摩揭陀或はベンガルの板彫に見るのは、この八大奇蹟なのであつて、(甲、五〇〇圖)この種の奉納物が極めて通俗になつてゐるので、之を納めるだけで、其等各地の巡拜をしたのに當る様になつた事を思はせるのである。中國で之を彫つた板石では、奇蹟の數だけに、石面を額形に仕切つて居り、恒河流域東方では、額形の分け方を離して、成道の像が中央を占